

「～なくて」、「～ないで」再考

戸村佳代

いわゆる否定のテ型には、「 S_1 なくて S_2 」と「 S_1 ないで S_2 」の2つの形があることは、よく知られている。ところが、従来、日本語の教科書では、2つの否定のテ型の違いについて、真正面から取り組んで説明を加えたものは、ほとんどないと言ってよいと思われる。初級の段階で、特に文型中心の教科書を用いた場合、これこれの文型では「～なくて」を、また別の文型では「～ないで」を使う、というように、2つのフォームを、文型との対応によって暗記させることが多い。しかし、このようなテ型の導入が行われた場合、(1)に見るような「～なくて」と「～ないで」が交換可能な例に行き当たった時、学習者が混乱に落ち入ることになりかねない。

- (1) a. 何も書かなくていいですか。
b. 何も書かないでいいですか。
(2) a. 愛犬のポチが死ななくてよかった。
b. 愛犬のポチが死なないでよかった。

言うまでもなく、「～なくて」と「～ないで」は常に交換可能であるわけではない。本稿の目的は、これら、2つの否定のテ型に注目し、それらの意味・用法の相違点を明らかにすることにある。

1. Mc Gloin (1976)

Mc Gloin (1976)では、「 S_1 なくて S_2 」を用いた場合と「 S_1 ないで S_2 」を用いた場合のそれぞれの含意関係について、次の(2)に見るような定式化を行って、両者の違いを明示的に表そうとしている。

- (2) a. S_1 なくて S_2 : CAUSE($-S_1, S_2$)
b. S_1 ないで S_2 : EXPECT (a, (PRECEDE(S_1, S_2)))

この定式化をかみくだいて言うと、次のようになる。

- (3) a. 「S₁なくてS₂」においては、S₁が実現しなかったことがS₁で表される事象の原因・理由となっている。
- b. 「S₁ないでS₂」では、S₁の内容がS₂に先行して実現しているということが話者に予想されていたにもかかわらず、実はそうでなかった。

(3)によれば、(4)の a, b の容認可能性の違いをうまく説明することができる。

- (4) a. *学校のあと、すぐ家へ帰らなくて、映画を見に行った。
- b. 学校のあと、すぐ家へ帰らないで、映画を見に行った。

(4 a) が容認されないのは、ごく常識的にみても、「すぐに家に帰らない」ということは「映画を見に行った」ことの原因・理由とは考えられず、むしろ、単なる付随する事態であると解釈されることに起因する。

ここで、話者が何らかの事情で（例えば、母親が外出中で、家にもどっても鍵が開かない、等）、まっすぐ家に帰ることができない状況に置かれていると仮定すると、その状況は、映画を見に行くことにする「理由」となり得る。従って、(4 a) は、(3)から予測できるように容認可能となる。

- (4 a) 学校のあと、すぐに帰れなくて、映画を見に行った。

(4 b) についても、「学校のあとすぐ家に帰ることが予定されていたのに、そうしなかった」という解釈は、正しい。

- (5)は一見、(3 b)に対する反例のように見える。

- (5) 僕は、別に見たくもない映画など見ないで家へ帰った。

しかし、これは、反例とはならない。Grice の「言うに値しないことは言うな」という語用論的原理から見ても(5)で示されたような状況を考えることが、極めて自然なことだからである。

(5) 友だちにしつこく誘われたのだが、僕は別に見たくもない映画など見ないで、家へ帰った。

(5)の状況では、「友だちに誘われたために、見たくもない映画を見ることになる」可能性は、話者にとっても、十分予想できることなのである。

2. Mc. Gloin (1976)の問題点

1で見たように、(2)の定式化に関する限り、Mc Gloinの主張は正しいように思われる。しかし、Mc Gloinの主張にも問題点がないわけではない。

Mc Gloinは「S₁なくてS₂」と「S₁ないでS₂」との相違点を記述した(2)を、より精密なものにするために、さらにS₁とS₂の主語が同一である場合について、次の条件を設けている²。

(6) a. S₁に現れる述語が〔+Stative〕の素性を持っている時、「～なくて」を用いることができ、S₁はS₂の原因・理由を表す関係にある。

逆にS₁の述語が〔-Stative〕の素性を持っている時、「～なくて」は用いられず、原因・理由の読みは得られない。

b. S₁がS₂の原因・理由を表す時には、「～なくて」が用いられる。

ここで、これらの条件の妥当性を検証するために、次の(7)～(8)を考えてみよう。

(7) ??山中さんは、ペーパーを書かなくて及第した。

(8) あの人¹は予防注射をしなくて、病気になった。

(7)では、この文が容認されるためには、「ペーパーを書かないことが及第するための必要十分な条件である」というような、極めて不自然な状況を設定しなければならない。そのため、容認度が低くなってくる。ところが、(8)では、「病気になったこと」の原因が「予防注射をしなかった」ことであるという解釈が自然なものであるために、「～なくて」が可能となっているのである。

ところが、(6)の条件に照らし合わせてみると、(8)は、確かに(6 b)の条件は満たしているけれども、(6 a)の条件には、明らかに違反している。即ち、(8)のS₁の動詞（以後V₁とする）である「予防注射をする」は〔+Stative〕の素性をもっていないのである。

(6)を保持しながら(8)で生じた問題を解決しなければならないとすれば、(6 a)、(6 b)を、並立的、同時的に機能する条件として扱うことはできなくなってくる。つまり、「～なくて」と「～ないで」の選択に際しては、(6 b)→(6 a)の順序で照合していく必要が出てくるのである。

この順序づけにより、(7)～(8)、および、次の文における「¹～なくて」と「～ないで」の分布が、一見、うまく説明できるように見える。

(9) 太郎は、英語ができ $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ ?\text{ないで} \end{array} \right.$, しぶしぶ英語塾へ通った。

(10) 宏一は義父とのことで家にいられ $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ *\text{ないで} \end{array} \right.$, 家出した。

さらに、(11)~(12)に見られるに「~ないで」が形容詞や「名詞+ダ」と共起しないことも、述語の状態性から説明することができる。

(11) この映画は、おもしろく $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ *\text{ないで} \end{array} \right.$ くだらない。

(12) あの人は、男で $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ *\text{ないで} \end{array} \right.$ 女だ。

しかしながら、上に述べた順序づけに従って適応される(6)の条件によっても、まだ、いくつかの点において問題が残る。

まず、(8)に対応する「~ないで」の文である(8)を見てみよう。

(8) あの人はず防注射をしないで、病気になった。

(6)によれば、 S_1 で表される事象がSで表される事象の原因・理由を表し得る時、 S_1 の述語がたとえ[-Stative]であったとしても、それに優先して「~なくて」が選択されなければならないはずである。ところが「~ないで」を用いた(8)でも、全く不自然さが感じられない。

さらに、(13)を見ると〔±Stative〕という素性が、本当に「~なくて」を許すか否かを決定する要素であるかということすら、疑わしくなってくる。

(13) a. その会社は、利益が全くあがら $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ ?*\text{ないで} \end{array} \right.$ 利益があると見せかけていた。

b. 太郎は、窓が閉まら $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ *\text{ないで} \end{array} \right.$ 一晩中ストーブをつけていた

(13で V_1 として現れている「あがる」「閉まる」は〔+Stative〕の動詞である。ところが(6)からの予測に反して「~なくて」を使った文は、全く不自然な感じがせず、むしろ「~ないで」のほうが受け入れ難い。

3. 代案

前節では〔±Stative〕という素性が「~なくて」と「~ないで」の分布を知るために、ある程度有効であっても完全なものとはいえないことを見た。ここで、(13 a, b)にそれぞれに対応する(14 a, b)を比べて「~なくて」と「~ないで」の容認性を観察して

みよう。

- (14) a. その会社は利益を全くあげ $\left\{ \begin{array}{l} * \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 利益があると見せかけていた。
b. 太郎は、窓を閉め $\left\{ \begin{array}{l} ? * \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 一晩中ストーブをつけていた。

(14 a, b) それぞれのV₁は、(13 a, b)の動詞に対応する他動詞である。即ち、主語の意志で制御しうる動作・行為を表す動詞である。

(13, 14)での観察をもとに、次のような仮説をたててみよう。

- (15) S₁の述語が主語の意志によってコントロールされ得るものである時「S₁なくてS₂」は許されず、「S₁ないでS₂」が要求される。

(15)によって、(13, 14)に見られる違いが、うまく説明されるように思われる。ところが、次の例は、(15)の反例となってしまう。

- (16) a. あの人は予防注射をしなくて、病気になった (=8)
b. パーティーには、田中さんが来なくて、山川さんが来た。

このことから、(15)を(15')のように改訂する。

- (15') S₁とS₂の主語が同一である時、S₁, S₂の中の述語によって表される動作・行為が共に主語の意志によってコントロールされ得るものであるなら、「S₁なくてS₂」は許されず、「S₁ないでS₂」が要求される。

この条件のもとでは(16 a)が容認されるのはV₂の[Controllable]の素性から、また(16 b)が容認されるのは、S₁とS₂の主語が違うことから説明できる。

(15')は、S₁に形容詞、「名詞+ダ」が現れる(11), (12)のような場合はもちろん、次のような場合の「~なくて」と「~ないで」の現れ方も説明することができる。

- (17) a. 学校のあとすぐ家に帰ら $\left\{ \begin{array}{l} * \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 映画を見に行った (=4)
b. 学校のあと、すぐ家に帰れ $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 映画を見に行った。
(18) 朝ごはんを食べな $\left\{ \begin{array}{l} * \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 学校へ行った。

(19) a. 弁護士は、その事件を訴訟にもち込ま $\left\{ \begin{array}{l} * \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 無事解決した。

b. その事件は、訴訟になら $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ \text{ないで} \end{array} \right\}$ 無事解決した。

このように「～なくて」と「～ないで」の選択には、[±Controllable] という素性が関与していると言うことができる。そして、重要なのは、この素性は、S₁の述語だけでなく、S₂の述語にも関わって、どちらのテ型を用いるかを決定している、ということである。(19)で提案された仮説は、次のように言い換えられる。

(20) S₁とS₂の主語が同一のとき、V₁・V₂が共に [+Controllable] であるならば、「～なくてS₂」は排除される。

では、[±Controllable] という素性は「S₁ないでS₂」の形と、どのように関わっているのだろうか。

まず、V₁のみ [-Controllable] である時、S₁とS₂の主語が同一であるか否かにかかわらず、「～ないで」は用いられにくい。

(21) そんな簡単な問題も解け $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ ?? \text{ないで} \end{array} \right\}$ 受験をあきらめることにした。

(22) ひとつの袋に入りきら $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ ?? \text{ないで} \end{array} \right\}$ 2つに分けた

(23) なんとなくもったいない $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ * \text{ないで} \end{array} \right\}$ その卵を食べなかった。

(24) 彼が泳げ $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ * \text{ないで} \end{array} \right\}$ 太郎が代りに泳いだ。

(25) 仕事が $\left\{ \begin{array}{l} \text{なくて} \\ * \text{ないで} \end{array} \right\}$ 毎日、うちにいる。

V₁もV₂も、共に [-Controllable] の場合、「～ないで」の現れ方は、幾分複雑である。まずS₁とS₂の主語が同一の場合、「～ないで」には不自然さが無い。

(26) a. 太郎は書き取りができないで困っています

b. あいつは、ろくにメスも持てない医者だ。

c. なにしろ、彼は、中学も出ていないで大会社の社長だ。

V₁もV₂も [-Controllable] で、S₁とS₂の主語が異なるときは、「～なくて」が好まれる。ただし、S₂の述語が感情的判断を表すものであれば、「～ないで」を許す話者もいる。

- (27) a. 私は、弟が泳げ $\left\{ \begin{array}{l} ?\text{ないで} \\ \text{なくて} \end{array} \right\}$ ほっとした。
- b. 私は、息子が書きとりができ $\left\{ \begin{array}{l} ?\text{ないで} \\ \text{なくて} \end{array} \right\}$ ほんとうに困っています。
- c. この子は、勉強もし $\left\{ \begin{array}{l} \text{ないで} \\ \text{なくて} \end{array} \right\}$, どうしようもない。

以上の観察をまとめると、次のようになる³。

	V ₁	V ₂	～なくて	～ないで
S ₁ の主語=S ₂ の主語	+Con	+Con	*	OK
	+Con	-Con	OK	OK
	-Con	+Con	OK	? *
	-Con	-Con	OK	OK
S ₁ の主語≠S ₂ の主語	+Con	+Con	OK	OK
	+Con	-Con	OK	OK
	-Con	+Con	OK	*
	-Con	-Con	OK	? *

4. Assertion

Mc. Gloin は、(2)で示した定式と共に、「S₁なくてS₂」と「S₁ないでS₂」のAssertionの違いを、次のように示している⁴。

- (29) a. S₁なくてS₂: Assert (a, -S₁ & S₂)
 b. S₁ないでS₂: Assert (a, -S₁) & Assert(a, S₂)

すなわち、「S₁なくてS₂」では、-S₁, S₂として述べられる叙述内容を一体として主張しているのに対して、「S₁ないでS₂」では、-S₁とS₂を別個に、それぞれ独立した叙述として主張していることになる。しかし、この提案が正しいものであるとすると、(30)の文については、その説明が難しいものになるように思われる。

- (30) a. その薬は飲ま $\left\{ \begin{array}{l} \text{ないで} \\ * \text{なくて} \end{array} \right\}$ ください。
- b. そこには、何も書か $\left\{ \begin{array}{l} \text{ないで} \\ * \text{なくて} \end{array} \right\}$ ほしい。

宿題は、まだ手をつけ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ないで} \\ \text{なくて} \end{array} \right\}$ ある。

d. 今日一日は、車を使わ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ないで} \\ \text{*なくて} \end{array} \right\}$ みよう。

また、(31 a, b) の文末の否定辞のスコープの違いを較べてみても、むしろ、 $-S_1, S_2$ の独立性は、「 S_1 なくて S_2 」の方が高いのではないと思われる。

(31) a. その事件は、訴訟にならなくて、解決されなかった。

b. その事件は、訴訟にならないで解決されなかった。

(32 a) では、文末の「ない」の力は、 $-S_1$ までは及ばないとするのが、自然な読みがあるが、(32 b) では、文末の「ない」が $-S_1$ にまで及ぶ（つまり、実際には、事件は訴訟になってようやく解決した）とすふ解釈は、十分、可能である。

5. 結 語

以上、「~なくて」と「~ないで」について、基本的には Mc Glom の主張をもとにし、[±Controllable] という概念を持ち込むことによって、Mc Glom の不備を補った。さらに、Assertion の違いによって、Mc Glom の提案の修正を示唆したが、これについては、さらに検討を重ねることが必要であると思われる。

基本的に「反因—結果」の関係を表す「 S_1 なくて S_2 」において、主語による意志の反映が S_1, S_2 両方に及ばないのは、「原因—結果」という関係が潜在的にもっている性質から説明することができると思われるが、「 S_1 ないで S_2 」に見られる制約については、さらに観察を重ねて、「~ないで」のもつ意味、含意を、より一層、明らかにしていく必要があると思われる。

註

1. (5)は、北川(1976)で Mc Gloin に対する反例として出されている。
2. Mc Gloin (1976, p 19)
3. Mc Gloin(1976)の〔±Stative〕に関する条件は、次のように表わされている。

主 語	V ₁	なくて	ないで
S ₁ ≠S ₂	+Stative	OK	OK
	-Stative	OK	OK
S ₁ =S ₂	+Stative	*	OK
	-Stative	OK	OK

4. これは、主に、言語直感をもとに定式化を行ったものであり、具体的な論拠は、述べられていない。

参考文献

- Grice, H P (1981) "Presupposition and conversational implicature" in Cole, P (ed) *Radical Pragmatics*. Academic Press.
- 久野 暉(1983)『新日本文法研究』大修館
- 北川千里(1976)「なくて」と「ないで」『日本語教育』29号pp 55—67.
- Mc Gloin, N (1976) "Negation" in Shibatani, M (ed) *Syntax and Semantics Vol 5, Japanese Generative Grammar*. Academic Press